

Newsletter

No.12



Photo by M. Yanagisawa

- 1 インタビュー・研究室探訪 8
地域の情報をつなぐー地域情報学プロジェクトの試み
- 5 地域研共同利用・共同研究の成果
・ 相関地域研究プロジェクト
・ 地域情報学プロジェクト
・ 地域情報資源共有化プロジェクト
・ 地域研究方法論プロジェクト
・ 災害対応の地域研究プロジェクト
- 8 JCAS の活動
- 9 シンポジウム・ワークショップの開催紹介
- 11 開催案内
地域研究統合情報センター・ワークショップのお知らせ
世界のエスキス
ー地域のカタチを読み解き、地域像を描き出すー
- 12 旅紀行「アーモンドの花咲くハウリ
ーウズベク農村の家族たちを想うー」
- 13 新任紹介／自著を語る
- 14 受賞

Newsletter from Center for Integrated Area Studies, No.12

CIAS

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

・ 出版物の紹介 ・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。



中央アジア
(朝倉世界地理講座―大地と人間の物語 5)
● 立川武蔵・安田喜憲 監修、帯谷知可・相馬秀廣・北川誠一 編
● 朝倉書店
● 2012年11月刊
● 450頁
● 17,850円



二〇世紀満洲歴史事典
● 貴志俊彦・松重充浩・松村史紀 編
● 吉川弘文館
● 2012年12月刊
● 840頁
● 14,700円

CIAS Discussion Paper Series No.27
ジャウィを学ぶ
ジャウィ文献講読テキスト

- 坪井祐司・山本博之 編 ファリダ・モハメッド 協力
- 京都大学地域研究統合情報センター
- 2012年12月刊
- 128頁



QALAM No.36-41 1953.07 ~ 1953.12

- 山本博之 監修
- 京都大学地域研究統合情報センター
- 2012年9月刊
- 259頁



QALAM No.42-47 1954.01 ~ 1954.06
● 山本博之 監修
● 京都大学地域研究統合情報センター
● 2012年11月刊
● 240頁



CIAS Discussion Paper Series No.28
Manga Comics Museums in Japan
Cultural Sharing and Local Communities
日本のマンガミュージアム
ーあらたな文化共有と地域社会ー

- 谷川竜一 編
- 2013年1月刊
- 141頁

QALAM No.48-53 1954.07 ~ 1954.12

- 山本博之 監修
- 京都大学地域研究統合情報センター
- 2012年12月刊
- 480頁



QALAM No.54-59 1955.01 ~ 1955.06

- 山本博之 監修
- 京都大学地域研究統合情報センター
- 2013年1月刊
- 480頁



CIAS Discussion Paper Series No.29
東アジア地域研究モノグラフ・シリーズ I
亀田治メモランダム
(旧 KDD 同軸海底ケーブル建設事業覚書)
● 貴志俊彦 編
● 京都大学地域研究統合情報センター
● 2013年3月刊
● 304頁

The Last Photograph



A worker of Perhutani, the state forest company in Java, Indonesia, is preparing teak seedlings for transplanting in the field. CIAS is a coordinating member of the project Transition to sustainable forest management and forest rehabilitation in Asia countries, a collaboration between APAFRI, Renmin University China, Seoul National University, and financially supported by APFNet. The project is a collaboration between universities from Japan, China, South Korea, Philippines, Indonesia, Vietnam, India and Malaysia and Laos and researches forest transition and how its understanding can contribute to better decision in, among others, efforts of climate change mitigation and adaptation.

(Wil de Jong)

表紙写真について

セネガル・ゴレ島
世界遺産にも登録されているこの島は、アフリカで集められた奴隷が、アメリカやヨーロッパに「輸出」される中継地であった。

京都大学地域研究統合情報センター
ニューズレター No.12

●発行日 2013年3月25日

●発行者
京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Tel : 075-753-9603
Fax : 075-753-9602
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/

●編集責任 谷川竜一・福田宏
●編集協力・表紙デザイン 川島淳子

INTERVIEWS

地域の情報をつなぐ — 地域情報学プロジェクトの試み

「研究室探訪」では、地域研究をめぐる議論を豊かにすることを期待して、さまざまな方にお話しをうかがいます。第8回は、農学の分野から東南アジアの研究に取り組まれると同時に、地域情報学のアプローチを使って地域横断的な研究の可能性を探究されている柳澤雅之准教授（地域研）です。

● 話し手・柳澤雅之（地域研准教授） × ● 聞き手・ブルドン宮本・ジュリアン（地域研研究員）

ブルドン宮本 ● 地域研では地域情報学プロジェクトを担当されていますね。これは非常に地域研らしいプロジェクトだと思いますが、少し読者の方に向けて説明して下さいませんか。

柳澤 ● 一口に言えば、地域研究と情報学をドッキングさせたものが地域情報学なのですが、この分野が誕生した背景には、幾つかの流れがあります。まず、地域研究そのものが変化し始めたことが挙げられます。元々、京都大学では文系・理系を跨ぐ形での地域研究が盛んだったのですが、1990年代より、研究者だけでなく、現地に暮らす人々自身が自分たちの地域について関心を持つ度合いが高まってきました。また、経済学や農学といった個々の分野でも、地域について研究する人が増えてきたので、地域に関する多くの情報が蓄積されるようになりました。他方では、情報学そのものにも大きな革新があり、今までは考えられなかったような素材も情報学で扱えるようになってきました。そこで、地域研究と情報学を組み合わせ地域研究の新しい方法を創り出そう、情報の新しい提示方法を考えよう、ということのできたのが地域情報学プロジェクトです。

ブルドン宮本 ● なるほど。文系・理系の研究を端緒にしながらも、プロセスと成果を共有し、発信してゆこうという試みですね。そうした点でいえば、地域研の原さんも地域情報学に取り組まれて重要なお仕事をされていますね。

柳澤 ● そうですね。人間文化研究機構というところで2005年から研究資源共有化システムの開発が進められ、原さんもこのプロジェクトに関わっておられました。その原さんが2006年、当時できたばかりの地域研にいらっちゃって地域情報学に取り組まれるようになりました。原さんは、情報学の立場から、地域研究に関連する多種多様な情報を共有化し、データベースとして利用できるシステムを構築されようとしているのに対し、私が担当する地域情報学プロジェクトでは、地域研究の課題に即して、情報学の技術やアイデアを用い、地域研究者による資料の収集や分析を工夫し、新しい地域研究の成果を出そうとしています。

すなわち、情報をどのようにして使えるような形にするかという点も大事ですが、それを使って地域研究にどう役立てるかという点により重点をおいています。

ブルドン宮本 ● 地域研究と情報学を組み合わせるのは一筋縄ではいけないと思いますが、どのような点が課題やポイントになりますか。

柳澤 ● そうですね（笑）。何が大変かという、地域研究者と情報学の専門家では思考方法が異なっていることでしょう。文系と理系の違いもあります。あまりステレオタイプ的な見方は良くないのですが、情報学の専門家はデータそのものを重視するところがあって、1であれば1、2であれば2ということになります。しかし、地域研究者はデータの裏側を読もうとする癖があって、1という情報を1と読んだり、2と読んだりする。つまり、眼に見えている情報だけでなく、周辺の見えない情報も併せて理解しようとする。だとすれば、1という情報が2に見えたり、3に見えたりするという点まで踏み込んで、データを情報学的に処理することは可能だろうか。こういった点から地域研究と情報学の専門家の間で議論が始まりました。地域ごとの違いをどう読み解くかというのも課題のひとつです。

ブルドン宮本 ● それはつまり地域ごとのコンテキスト（文脈）を読み解くということですね。

柳澤 ● そのとおりです。地域研究者の間では、ナラティブ（物語）と呼んだりもします。歴史的なプロセスを共有するとか、あるいは、村などのもっと小さなレベルで認識を共有するという点でも構いません。地域の時間や空間、課題を共有する集団が持っているイメージや物語、それがコンテキストということになります。情報学のアプローチからは、時空間を分析ツールとして備えたソフトも開発しましたし、そこから分かってきたこともたくさんあるのですが、注意しなければいけないことは、時空間そのものもコンテキストに依存するんですね。つまり、どのように時間と空間を区切るのかという点そのものが地域研究では問題になってしまうわけです。区切り方によっては地域の見え方が変わってしまいますから。

ブルドン宮本 ● すると、天気予報とは違うということですね。

柳澤 ● 察しが良いですね（笑）。もちろん、天気を予想すること自体は非常に難しいのですが、どんなデータを見れば良いかという点については、ある程度、共通理解ができています。天気を予想するための普遍的なモデルがあるわけですね。しかし、地域研究については統一的なモデルがありません。このデータをみれば、どの地域

も分かるというわけにはいかないのです。その意味では、地域ごとにアプローチを考え、地域ごとの分析モデルを作っていかなければなりません。でも、地域ごとに分析して終わりというわけではなく、それを地域間の比較に活かしていく必要があります。実際のところ、一つの地域だけを見ていても分からないことはたくさんあって、地域間の比較が必要だという議論は以前からなされてきました。でも、今では地域研究の情報も膨大な量が蓄積されていますから、地域ごとの情報を処理し、そこからさらに他の地域との比較を行うためには、どうしても情報学の力が必要となります。まさに、地域情報学の出番ですね。

ブルドン宮本 ● そのとおりですね（笑）。具体的にはどのような事例をどのように扱われているのですか。少し事例をあげて説明をお願いします。

柳澤 ● 地域研では現在30近くのデータベースを構築しているのですが、そのなかで、地域情報学プロジェクトに直接関連するものとしては、まず、災害関連データベースというのがあります。これは地域研の西さんと山本さんが中心となって進めている、インドネシアの地震・津波に関するデータベースです。このシステムではたくさんの方のアイデアが生かされていますが、例えば、災害時に現地の報道情報を自動的に収集して地図上にのせ、被害の全体像を示す仕組みを構築しています。

また、その応用として、選挙や紛争などの社会経済的な出来事に関する情報を自動収集し、地図上で示すシステムも作っています。災害関連データベースで印象深かったのは、2011年12月にインドネシア・バンドアチェで、データベースの紹介を兼ねたワークショップを開催したときに、地元の研究者や行政の担当者が非常に喜んでくれたことです。地域のコンテキストを共有するデータベース・システムであったことが良かったのではないかと考えています。

ブルドン宮本 ● 地域研らしいデータベースとして、上座部仏教のデータベースもありますね。

柳澤 ● はい。西南中国を含む東南アジア大陸部の上座部仏教寺院と出家者に関するデータベースですね。この地域での僧侶の移動をマッピングするわけですが、ここから、公的な形で理解されている仏教の動態とは違う、ローカル・レベルでの仏教の実態が見えてきます。マッピングそれ自体は既存のGIS（地理情報システム）技術でもできるのですが、地域研で作っているデータベース

では、僧侶の動きを非常に見えやすくしています。あたり前のことですが、既存の GIS は仏教を理解するためにできているわけではありませんから、GIS の技術を借りつつも、東南アジアの上座部仏教を理解するために必要なデータセットを付け加え、そこから独自の寺院マッピング・データベースを構築しています。データとして集まっているのは 2000 年から 09 年までの 10 年間なのですが、そこから、ひとりひとりのお坊さんの人生が見えるだけでなく、全体としてどのような宗教実践が行われているのかという点も分かっています。

ブルドン宮本 ● 他にも「**カラム Qalam**」という雑誌もデータベース化していますね。ここには地域研究と情報学のエッセンスはどのように詰まっているのでしょうか。

柳澤 ● 『カラム』は 1950 年から 20 年にわたってシンガポールで発行されていたマレー語の雑誌で、ジャウィ文字で書かれています。当時のマレー・インドネシア語雑誌が次々と使用文字をローマ字に切り替えていくなかでジャウィ文字を維持した数少ない雑誌のひとつです。『カラム』誌上からは、中東をはじめとする世界各地のイスラムの動向を紹介しつつ、それを東南アジアにふさわしい形にして人々に伝えようとする意気込みが伝わってきます。国別や民族別に語られてきたイスラム教圏東南アジアの現代史を考えるうえで非常に貴重な史料と言えます。地域研では、この雑誌をデジタル化していますが、雑誌ができた当時と今ではアラビア文字の翻字の仕方が違いますし、マレー語とインドネシア語は似ていると言っても違う単語がたくさんあるので、そうした違いを架橋するシステムを作らなければなりません。この点については、情報学が持っている多言語処理のノウハウを使うことになります。

ブルドン宮本 ● 文化を背景にした言葉の深い意味と情報処理の高い技術が生かされているわけですね。しかもこのデータベースはマレーシアでも歓迎されていると聞いていますし、私自身もそう感じています。

柳澤 ● そうですね。このプロジェクトは、マレーシアの研究機関との共同研究にもなっています。これは、地域情報学プロジェクトの特色だと思います。データベースを構築するにあたって、そのデータを実際に使っている研究者や関連機関と協力して、研究のためにはどのようなデータベースが望ましいかを検討しています。つまり、データベースを作る側と使う側が絶えず議論を行うことによって、よ

り良いデータベースを作っていこうとしています。

ブルドン宮本 ● 柳澤さんが中心になって今立ち上げていらっしゃるフィールドノートのデータベースについてはいかがでしょうか。

柳澤 ● 京大には、世界各地でフィールドワークをされてきた研究者がたくさんいて、そのフィールドノートが数多く残されていますが、かつて一線で活躍した方々が高齢化し、現地の状況を記したフィールドノートが死蔵されつつあります。これらの資料は、1960 年代以降の世界各地に関する貴重なもので、これを新たな研究資源として活用していくことを考えています。例えば、東南アジア研究所にいらっしゃった高谷好一先生の景観観察のフィールドノートや、山田勇先生の森林景観の写真などをデータベース化している最中です。これらは、アカデミックな手続きに従って記録がなされているため、当時のことを知る第一級の資料となっています。ただ、地域研のフィールドノート・データベースでは、単に当時の記録を再現することだけを目的にしている訳ではありません。記録した研究者による地域研究の思考方法やアプローチも検証できるようにしておきたいと考えています。というのは、地域研究は学際性や総合性、文理融合といったことが特徴としてよくあげられますが、その方法論は人によってさまざまです。地域研究者が現地から収集した記録から、論文や書籍として成果を公表するまでの過程で、どのような思考方法やアプローチをとっていたのかを知ることが、これまでブラックボックスになっていた全体性の理解という地域研究の重要なプロセスを検証することに役立つのではないかと考えています。地域研図書室にはまた、同じく東南アジア研究所にいらっしゃった石井米雄先生の蔵書コレクション（公開準備中）もありますが、1 万点を超える蔵書を先生の書斎と同じように配置する予定です。これもまた、ひとりの研究者がどのようにして独自の学問体系を築き上げていったかを辿る試みと言えます。

ブルドン宮本 ● なるほど。地域のみならずその研究をしてきた地域研究者すらデータベースに含み込んでいく必要があるわけですね。加えて京大出版会との共同プロジェクトも進んでいますね。

柳澤 ● 最近出版された『グリッド都市—スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生』（著者：布野修司，J.R. ヒメネス・ベルデホ）ですね。建築の専門家の布野修司先生（滋賀県立大学教授）の著書なのですが、本の中には

建築設計図や写真などの図版がたくさん入っていて、その一部に QR コードが埋め込まれています。スマートフォンなどで QR コードを読むと、地域研のデータベースにアクセスし、それに関連する情報を手に入れることができるシステムを京大出版会さんと共同で開発しました。つまり、出版物を通じてより多くの方々に地域研のデータベースを利用して頂くと同時に、最終的には、布野先生のフィールドワークを体験してもらえればと考えています。研究の営みを多くの方々に拡大する試みとも言えるでしょうか。

ブルドン宮本 ● データベースを社会に開かれたものにする、ということでしょうか。だとすればその方向性について、今どのようにお考えですか。

柳澤 ● 地域研のデータベースと社会との関わり方は少し異なるふたつの方向性があると思っています。ひとつは、社会と広く関わりながらデータベースを作っていく方向性です。研究者が持っていたデータを公開すると同時に、新聞社や出版社、あるいは市民の方々と協働しながらデータベースを作っていますので、ウィキペディアと同様、社会に開かれたデータベースとなっています。多様な情報をできるだけ多くの方に利用していただければよいと思っています。最近のワークショップで気づいたことですが、地域の人たちが、かつての自分の村のことを知らないケースって意外とたくさんあるんですね。いざ自分の村で村おこしをしようとしたときに、30 年前の自分の村はどうだったかという情報がないような地域がたくさんある。そういう人たちに、私たちの持っている情報を提供することもできるし、またそこで使っても



【柳澤雅之】京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻博士課程修了、京都大学東南アジア研究センター助手、同助教授を経て、2006 年 4 月から現職。主たる業績は、「自然科学分野の地域研究：地域情報の限定性を克服するために」『地域研究』（昭和堂）12 巻 2 号、pp.116-130、2012 年など。

らえると、新しい情報を加えていくことができる。そうしたデータベースの方向性です。

もうひとつの方向性は、ある特定の課題や地域社会と関わる方向性です。地域のコンテキストを共有するデータベースという話を先にしましたが、地域のコンテキストといっても、地域内でひとつしかないわけではありませんし、何を課題にするかによっても異なります。そのため、特定課題に特化したり、特定のコンテキストで収集されたりしたデータベースは、きわめて地域性が高く、逆に汎用性は低いものとなります。

この場合、可能な限りデータの特長性を説明すると同時に、課題を解決するための分析プロセスを公にしておくことが望ましいと考えています。そうすることで、当該分野や当該地域の人だけでなく、関連する分野や地域の人たちにも利用していただければよいと考えています。いずれにせよ、まだまだ試行錯誤の部分も多いのですが、社会と繋がった形のシステムにすることで、使えば使うほど使いやすいシステムになっていくのではないかと考えています。

ブルドン宮本 ● データベースを作り、社会に開かれたものにするという中で、その利用や刷新に、どれだけ多様な人を巻き込んでいけるかということが、大きなポイントとなっていることですね。しかもお話では、必ずしもそれは人の数を意味するのではなく、具体的な特定課題に迫るような地域性の高い情報を、深く理解・共有するためのフレームワークも同時に整備する必要があるということでした。まさしくそうですね。今日はどうもありがとうございました。



【ブルドン宮本・ジュリアン】地域研で、パターン分析および多言語資料群の可視化、地域研究に関するデータの時間空間解析に関する研究を進めている。フランス・カエン大学 (Caen Basse-Normandie) を 2005 年卒業、イギリス・シェフィールド大学 (Sheffield) に留学後、フランス・サンテティエンヌ大学 (Saint-Etienne) にて 2007 年修士号を取得し、現在に至る。

地域研共同利用・共同研究の成果

地域研は共同利用・共同研究拠点として、国内外の地域研究機関と連携して共同研究を推進しており、現在、「〈地域〉を測量する—21世紀の『地域』像」、「地域情報学の展開」、「CIAS 所蔵資料の活用」、「地域研究方法論」、「災害対応の地域研究」という5つのプロジェクトの下、7つの複合同共同研究ユニットと20の個別共同研究ユニットを抱えて研究活動を行っています。

本年3月をもってすべての複合同共同研究ユニットおよび個別共同研究ユニットが満期を迎えることから、ここではそれらの個別共同研究ユニットを取りまとめる7つの複合同共同研究ユニットの代表者にこれまでの成果を報告してもらいます。4月からはまた新たな複合同共同研究ユニットと個別共同研究ユニットがスタートしますので、これからの活動にもご期待下さい。

関連地域研究
プロジェクト

複合同：新自由主義の浸透と社会への影響に関する地域間比較研究

1980年代以降、新自由主義は、世界各地に広がった。多くの国では、その影響で格差が拡大する現象も観察されてきており、新自由主義路線の見直しが主流となる国や地域も現れ始めている。ただ、新自由主義路線の浸透は、地域により、また一地域のなかでも、一様ではない。また、その影響や反応の現われ方、見直しの方向性についても、一定の現象や路線に収斂してはいない。そこで、本研究では、世界各地における新自由主義の浸透度を検証したうえで、政治社会に与えた影響を分析してきた。そして新自由主義に対する反応や見直しをめぐる動向を検証した。そうした一連の研究を特定の地域内における比較分析および地域間比較研究として実施し、比較研究の分析枠組みの構築と検討を試みた。重点的に比較する地域として、中東欧・ロシアとラテンアメリカに焦点をあてた。この2つの地域を取り上げた理由として、両地域は、幾つかの側面で相違が観察されるものの、19世紀末以降の近代化過程の重要な位相において共通性を有し、体制転換後の政治と経済でも同様の課題に直面してきたという点で、「地域のコンテクスト」の共通性が高いためである。両地域の比較から、新自由主義の源流およびその波及過程には、地域を越えた共通性が存在すること、その一方で、それぞれの地域での新自由主義の浸透には温度差があることが確認された。また、新自由主義の実施時期の違いにより、政党政治における新自由主義の争点化に違いが生じたことが判明した。早期に新自由主義路線をとりいれ実施した場合、後の政党政治において新自由主義をめぐる争点化の程度が低くなり、安定化につながる事が両地域の事例に共通している。

(村上勇介)

複合同：自然と人の相互作用からみた歴史的地域の生成

本年度の複合同共同研究は、次の4つの個別共同研究ユニットから構成されていた。

「相関型地域研究による総合的マツタケ (*Tricholoma spp.*) 学の創成 (代表: 大石高典、京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員)」では、アジアと北米の研究者が共同で、マツタケの栽培技術や流通が、グローバル世界のもとで国際的なネットワークを形成し、従来にない新たな産地の形成や技術革新を進めている様子を明らかにした。

「アブラヤシ農園拡大の政治経済学: 東南アジアを超えて (代表: 林田秀樹、同志社大学人文科学研究所・准教授)」では、現地調査の結果もふまえて、現地社会での変容を分析した。

「アフリカにおける人為植生の成立要因と歴史の変遷に関する地域間比較研究 (代表: 藤岡悠一郎、近畿大学・博士研究員)」では、アフリカ人為植生データベースの構築を進め、人的ななかかわりと地域ごとに独特な植生の関係性を検討した。

「アジアの大河流域における地域形成が流域ガバナンスに及ぼす影響 (代表: 山口哲由、京都大学地域研究統合情報センター・研究員、愛知大学国際中国学研究センター・研究員)」では、中国のカワウ漁の事例から、野生と家畜、自然と人工の境界について検討し、そうした特徴を持つ河川のガバナンスについて議論した。

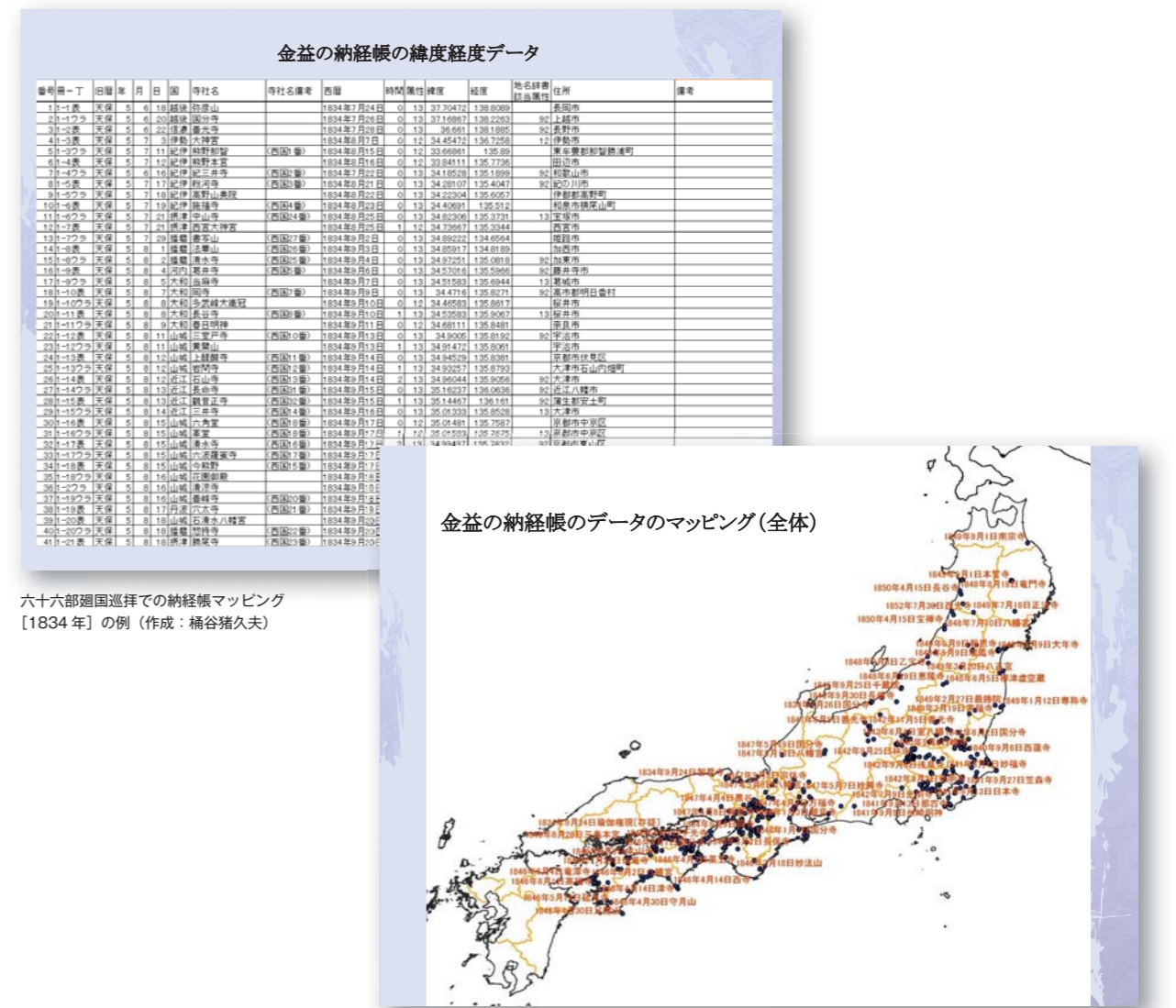
いずれの個別研究ユニットでも、具体的な事例を通じた自然と人の相互作用を検討していることが共通しているものの、マツタケやアブラヤシがグローバル社会に直結した影響を受けた自然と人の相互作用である一方、アフリカの人為植生や中国の河川ガバナンスはローカルな論理のもとで展開される自然と人の相互作用である点が大きく異なり、そのことが、それぞれの地域性を顕著に表していた。

(柳澤雅之)

複合同：〈宗教〉からみた地域像

「〈宗教〉からみた地域像」は、昨年度より継続する①「癒し空間の総合的研究—聖空間としての延喜式内社とアジアの聖地の比較研究 (代表: 鎌田東二、京都大学こころの未来研究センター)」、②「功德の観念と積徳行に関する地域間比較研究 (代表: 兼重努、滋賀医科大学医学部)」、今年度限りの③「異宗教・異民族間コミュニケーションにおける共生の枠組と地域の複相性に関する比較研究」(代表: 王柳蘭、京都大学地域研究統合情報センター)の個別共同研究ユニットより構成され、それぞれが国内での研究会を中心に活動を行うとともに、個別ユニット代表をまじえた合同研究会を実施した。①は東日本大震災を受けて、災害と神社の時空間の関係、復興時に地域芸能が果たす役割に焦点を絞り、被災神社と延喜式内社との比較マッピングの展望を開いた。②は、非仏教圏の地域で使われる功德について検討を重ね、東南アジア仏教徒研究での議論を相対化しつつ宗教的救済財の社会的位相を探った。③は、移動する人々が移動先で創る内発的共生を検討することで多文化共生論と異なる地域間比較研究を展望した。成果は、いずれも商業出版、地域研究統合情報センター・ディスカッションペーパー等で公開される。本複合同ユニットは、当初から掲げ、昨年度終了の個別ユニット「聖なるもののマッピング (代表: 片岡樹)」で試みた寺院、聖地、巡礼・納経マッピングを継承しつつ、データを地図化する際の具体的な課題や利用法も検討し、定量化できる資料を定位づける過程の「野生のナビゲーション」が、忘却される地域の災害経験や人の移動を指針づけるものを掘り起こす可能性を確認した。これらの議論を踏まえた成果は、平成25年度中にディスカッションペーパー等で公開する。

(林行夫)



地域情報学 プロジェクト

地域情報学プロジェクトでは、客観的かつ再現性のある方法で大量データを処理するという情報学の特性を生かした地域研究の展開を図るために、地域研究資料のデジタル化、データベース化、可視化、計量的解析などに関する研究を継続している。平成 24 年度は、My データベース、検索 API、時空間情報ツールなどの研究開発を行った。

My データベースは、個人あるいは小規模プロジェクトの研究結果をデータベースとして公開するための支援システムである。一定の条件を満たした CSV あるいは XML ファイルさえ作成できれば、それを My データベースに登録し、検索項目や表示項目など幾つかの要件を管理画面から設定するだけで、データベースは完成する。データ量が少なければ、データベース公開まで 30 分かからない。ただし My データベースの検索機能は限定されており、自由に変更あるいは拡張することができない。この欠点を補うために検索 API を開発した。多少のプログラミングスキルは必要であるが、この検索 API を利用すれば、研究目的に応じた検索手順や表示画面などを容易に作成できる。My データベースおよび検索 API は 2013 年度の公開を目指して作業を続けている。

時空間情報ツールについては、空間ツール (HuMap) と時間ツール (HuTime) の機能整備と事例研究を継続した。また両者の連携により、資料を時間と空間それぞれの面から可視化・解析できる環境の実現を目指し、両ツールに共通する機能の名称や操作方法の統一と、データ構造の共通化を進めた。さらに、日本語と英語の 2 カ国語によるインターフェースの実現と操作マニュアルの作成により、利用者の利便性向上を図った。(原正一郎)

地域 情報資源共有化 プロジェクト

本プロジェクトの活動は、複合ユニット「CIAS 所蔵資料の活用」(研究代表者：帯谷知可)を中心に展開されている。このユニットのもとで平成 24 年度は、「帝政ロシアの植民地的『知』の中の中央アジア：『トルキスタン集成』データベースの検索機能の高度化を通じて」(研究代表者：帯谷知可)、『『混成アジア映画』に見る世界：潮流としてのマレーシア映画を中心に」(研究代表者：篠崎香織)、「島嶼部東南アジアにおける国民国家形成とマレー・ムスリムのネットワーク」(研究代表者：坪井祐司)の 3 つの個別ユニットがそれぞれの計画に従って活動を行ってきた。複合ユニット全体としては、個別ユニットの横のつながりも念頭に置きながら、地域研の研究とデータベース構築と図書館の活動とをつなぐフォーラムのような機能を果たすべく、地域研究資料とそれにまつわる様々な権利の問題への着目、希少資料の国際的共有の意義と手法、複数言語間の資料横断検索の意義と手法などのトピックを立てた研究会を開催し、議論を積み重ねてきた。本年度でこの複合ユニットの研究期間が終了となり、ひとつの節目を迎えるにあたって、これまでのトピックの中から地域研究と著作権、地域研究資料としての映画の二つを取り上げ、メンバー外にも開かれた研究会「地域研究資料をとりまく新たな波—デジタル化時代の課題と展望—」を開催した(2013 年 3 月 22 日)。これらの成果を生かして、地域情報資源共有化プロジェクトは次の段階へとステップアップすることが期待される。(帯谷知可)

地域研究方法論 プロジェクト

複合ユニットのもと、2 つの個別ユニットにより研究を進めた。複合ユニットでは、地域研究者のキャリアパスに関する調査に着手し、また、地域研究と外交実務・人道支援の連携のための具体的な取り組みを進めた。個別ユニット「紛争・災害後社会のメディアと記憶」(代表：西芳実)では、地域研と学術交流協定を結んでいるインドネシア・アチェ州のシアクアラ大学津波防災研究センター (TDMRC) との共同研究として、TDMRC から 3 名を京都大学に招いてワークショップ「災害後社会の再建と情報管理」を開催した。また、12 月 22 日には一般公開シンポジウム「記憶の写し絵—内戦・テロと震災・原発事故の経験から紡ぐ私たちの新しい物語」を開催し、東ティモール紛争やバリ島爆弾事件などにより社会内部の深刻な亀裂を経験した事例と比較しながら、東日本大震災後の日本に見られる社会の亀裂への対応を地域研究の立場から検討した。個別ユニット「地域研究における情報資源の共有化とネットワーク形成による異分野融合型方法論の構築」(代表：錦田愛子)では、イスラエル／パレスチナを対象とする多様な分野の研究者が集い、他地域との比較の視点を入れながら、地域間、分野間、そして世代間を架橋するイスラエル／パレスチナ研究のあり方を模索した。1 年間に及ぶ研究会内での議論や研究データベース作成の試みを通じて、世界規模の課題を背負った「焦点地域」を対象にする同地域については個々の研究者が背負う社会的状況から完全に切り離れた研究は成り立たないことを認めた上で、イスラエル／パレスチナを「通史を書かない」地域と捉え、その積極的な意味を検討することを通じて地域研究の意義と方法を検討した。(山本博之)

災害対応の 地域研究 プロジェクト

災害は社会が被災前から抱える潜在的な課題をあらわにすると同時に、支援や復興の過程で被災社会の内面に新しい関係の形成を促す。その意味で、災害は平常時の社会には困難だった変革に取り組む契機となりうる。「災害対応の地域研究」プロジェクトは、地域研究の知見を活用して、災害時に顕在化する社会の課題や特徴を捉え、災害対応を通じた社会の課題への対応を検討することを意図して昨年度より新設された。

地域研究コンソーシアムによる「東日本大震災に伴う共同研究」との共催による公募で採択された「3・11 被災後のディアスポラ・コミュニティにおけるコミュニケーションの総合的研究」(代表：中島成久、平成 23～24 年度)では、東日本大震災を外国人コミュニティの視点から捉える試みの一環として、原発事故の影響が大きい福島県南相馬町で外国人被災者の調査を行った。この調査で得られたネットワークを活用し、人道支援団体、映像作家、原子力専門家、地域研究者をパネリストにした一般公開シンポジウム「原発震災被災地復興の条件—ローカルな声」を開催した。シンポジウムの成果は JCAS コラボレーションシリーズとして刊行される。

プロジェクトとしては、東南アジア学会関西例会との共催による一般公開ワークショップ「タイ洪水が映す社会—災害対応から考える社会のかたち」を実施し、バンコクの洪水対策史、バンコク居住者の生活への影響、タイ政府の対応の 3 つの観点から 2011 年のタイ洪水の諸相を検討し、災害対応を直接の専門としないタイ地域研究者やタイ以外を対象とする地域研究者を交えて、それぞれの専門の立場からタイの災害対応にあらわれるタイ社会のかたちについて議論した。(西芳実)

地 域 研 究 コ ン ソ ー シ ア ム の 活 動

2012 年度地域研究コンソーシアム年次集会は 2012 年 11 月 3 日 (土)、北海道大学スラブ研究センターにおいて開催されました。午前中の総会に続いて、午後からは一般公開シンポジウム「地域研究と自然科学の協働—広域アジアの地域研究を例に」が行われ、ロシアの森林火災、インドネシアの泥炭、北アフリカの砂漠化、鳥インフルエンザを具体的事例として、地域研究者と自然科学者の協働の在り方をめぐる活発な議論がありました。また、終日会場に隣接するスペースにおいてポスター・セッションも行われました。コンソーシアム・ウィークの催しとしては、学会連携シンポジウム「アジアのディアスポラ文学—日本とマレーシアの交流文学事例から」(2012 年 10 月 27 日、立教大学)も開催されました。

年次集総会において第 2 回地域研究コンソーシアム賞の選考結果が公表されました。受賞者は次の通りです。

- ・研究作品賞：高倉浩樹著『極北の牧民民サハ—進化とマイクロ適応をめぐるシベリア民族誌』(昭和堂、2012 年)
- ・登竜賞：水谷裕佳著『先住民バスクア・ヤキの米国編集—越境と認定』(北海道大学出版会、2012 年)
- ・社会連携賞
西芳実氏の「インドネシア共和国アチェ州における地域情報学を活用した災害対応に関する国際ワークショップの実施」活動(2011 年 12 月 21 日～26 日、インドネシア、バンダアチェ州で開催)

JCAS では次世代ワークショップ、共同企画研究、共同企画講義、学会連携、オンデマンドセミナー、社会連携プロジェクト、地域研究方法論プロジェクトなどの公募プログラムを推進しています。来年度に向けて準備を進めて参りますので、ぜひご応募ください。詳細については JCAS のホームページをご覧ください。

<http://www.jcas.jp/>

JCAS のメールマガジン JCAS NEWS は、さまざまな地域研究関連のイベント、公募、出版などの情報を毎週お届けしています。ぜひご登録ください。配信申込みは次のアドレスに本文なしのメールをお送りください。jcasnews-join@jcas.jp

(帯谷知可)

シンポジウム・ワークショップの開催紹介

シンポジウム

「近代アジアをめぐる絵はがきメディア ——帝国・表象・ネットワーク」

2012年11月10日(土)～11日(日)、国際日本文化研究センター(以下日文研と略)を会場として、表記シンポジウムを開催した。開催にあたっては、日文研、京都大学地域研究統合情報センター、財団法人東洋文庫のメンバーが代表となっている科研プロジェクトが合同して主催者となった。

2日間にわたったシンポジウムは、私の基調講演「情報資源としての絵はがきとその利用」に始まり、以下の3部構成で進められた。

◆第一部 帝国と植民地の表象

報告者：向後恵里子(早稲田大)、山路勝彦(関西学院大)、朴美貞(日文研)

コメンテーター：阿部安成(滋賀大)

◆第二部 古写真・絵はがきで再現する古都の景観・風景

報告者：富井正憲(韓国・漢陽大)、西村陽子(国立情報学研究所)、樋口穰(京大外大)

コメンテーター：谷川竜一(京都大学地域研)

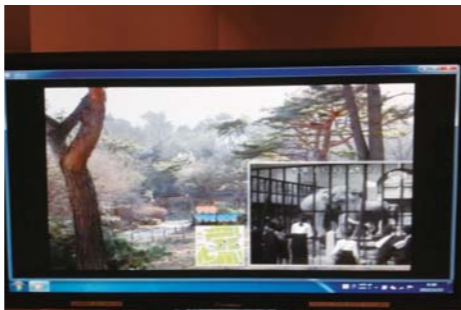
◆第三部 情報・ネットワークとしての絵はがきの解析

報告者：森洋久(日文研)、生田誠(絵はがき研究家)、吉井秀夫(京大)

コメンテーター：稲賀繁美(日文研)

美術史、歴史学、建築学、情報学、考古学の専門家が、絵はがきを素材として、その研究利用の方法、具体的な研究成果を紹介することがシンポジウムの趣旨であった。報告内容について詳細に紹介する余地はないが、生田氏をはじめとした絵はがきコレクターに報告や質疑に参加いただいたことで、従来の学会討論会には見られない、自由かつ多様な形での報告が行われたように思う。企画者のひとりとして、唯一の反省点は、フロアとのディスカッションを深める時間を十分に持ち得なかった点があげられるが、シンポジウム全体としては、絵はがき研究の可能性を実感できた2日間であった。なお、以上のような討論とともに、特別展示「懐かしい古都への旅—日文研所蔵絵画像資料を中心に」を同時開催した。

最後になるが、開催にあたっては、日文研の朴美貞さんには開催準備から当日の運営までお世話になった。心より感謝申し上げたい。(貴志俊彦)



「富井正憲教授が開発した、清水宏監督作品『京城』(1940年)と現在のソウルの風景を同期させる動画システム」

シンポジウム

「記憶の写し絵—内戦・テロと震災・ 原発事故の経験から紡ぐ私たちの新 しい物語」

2012年12月22日、キャンパスプラザ京都にてシンポジウム「記憶の写し絵—内戦・テロと震災・原発事故の経験から紡ぐ私たちの新しい物語」が開催された。大きな災厄は社会に深刻な亀裂をもたらす。物質的な復興を遂げ、日常生活を取り戻した後も、社会に撃ち込まれた深い亀裂が修復されるには長い時間がかかる。私たちはこの亀裂にどう向き合い、どう繋ぎ直すのか。本シンポジウムでは、林行夫センター長の開会挨拶に続き、亀山恵理子(奈良県立大学)による「東ティモール独立から10年—紛争はどのように語り継がれるのか」、西芳実(地域研)による「語りえぬ痛みを分かち合う—バリ島爆弾テロ事件とインドネシア」、寺田匡宏(総合地球環境学研究所)による「災厄の「見えにくさ」と距離—アウシュヴィッツ—ベルリン/フクシマ—東京」の3つの報告を通じて、同じ社会に暮らす人々によって身近な人々が傷つけられた経験をもつ人々による社会の亀裂を修復する営みについて考え、また、杉野希妃(プロデューサー/女優)と深田晃司(映画監督)を特別ゲストに迎え、東日本大震災後の人々の反応を描いた映画『おだやかな日常』を題材として災いの記録と記憶について検討した。一般参加者を交えた総合討論では、記憶は時とともに変化するものであり、忘却や再編を含めて記憶のリアリティを考える必要があることや、災いを直接経験していない人が当事者性を背負うことの積極的な意味などが議論された。現実を素材に「物語」を作ってフィクションとして映像で示す映画制作と、事実を積み重ねて議論を組み立てて言葉で発表する研究は、社会の現実をもとに「物語」を編み出し、その「物語」を通じて社会に働きかけるという共通点を見出すことができる。地域研究者を主役にした映画『ほとりの朔子』を公開予定の深田監督からは、研究者も表現者としての側面を持っており、映画と研究の連携によって新しい物語が提示される可能性があることが指摘された。(山本博之)



国際
ワークショップ

「アチェの回復に向かったコミュニティの強化」

インドネシア・バンダアチェにて10月21日から23日、地域研と地元シアクアラ大学との共催により「アチェの回復に向かったコミュニティの強化」と題された国際シンポジウム・ワークショップが開催された。インドネシア国内からの講演者4名が防災と医療・教育に関する講演を行ったほか、地域研からは原正一郎教授、柳澤雅之准教授、星川圭介助教の3名が参加し、地域研究や地域情報学の立場から災害対応や復興、コミュニティの機能と役割に関して講演を行い、会場を埋めた200名前後の聴衆からは多くの質問が寄せられた。

本シンポジウムは例年シアクアラ大学の主催により国内シンポジウムとして実施されてきたものであるが、第4回となる今回、昨年度地域研との間でMOUを締結した同大学津波防災センター(TDMRC)の橋渡しにより地域



研との共催にて国際シンポジウムとして開催する運びとなった。2011年12月に地域研と津波防災センターとの共催で行われた国際シンポジウム「災害遺産と創造的復興—地域情報学の活用を通じて」に引き続く、地域研による現地貢献の具体化である。

なお、本シンポジウムは現地シアクアラ大学の学生たちにより自主的に企画・運営されており、運営経費の一部は学生たちが企業から集めた寄付金であるという。「アチェにはまだ何も無いから自分たちでやる」と語った運営スタッフの学生は誇らしげであり、アチェの未来は明るいと感じた。(星川圭介)

・地域研究統合情報センター・ワークショップのお知らせ
 地域研では下記のワークショップを計画しています。ふるってご参加下さい。

世界のエスキス

— 地域のカタチを読み解き、地域像を描き出す —

日 時：2013年4月27日(土) 13時30分～18時25分
 場 所：稲盛財団記念館大会議室(3階・333号室)

■ 趣旨説明

与条件の変化や現実に対応しながら、絶えず計画を練り直していく作業そのものを、建築分野ではエスキスと呼ぶ。そうだとすれば、地域の現場と学問の現場の往還を通して、地域像を練り上げていく地域研究者たちの姿勢は、まさしくエスキスである。本ワークショップでは、地域研究者たちの分析手法や思考の構築作業をエスキスという観点で捉え、そこから描き出される地域像を持ち寄る。それによって、より豊かで手応えのある地域の見方・あり方を議論し、導き出したい。

一般的には地域の来歴や現在の状態は、人々の語りや文書などを通して言葉として表現されてきたが、形態(カタチ)として記録されている情報も重要である。民具、建築、景観、植物、さらには表現された形態としてのしぐさ、体操、映画に描かれる情景など、枚挙に暇がない。それらは地域や社会の変化の中で様々なカタチとして生まれ、変化してきたが、見方を変えればそのカタチは、様々な地域や社会そのものを作り出す際の手立てでもあった。つまりそれは、今の私たちにとって、地域や社会の創造や再設計に関わる参照可能な経験と手法のリソースとしてもあるのだ。地域の状況を理解することは、そうした変化や創造の過程を読み解くことに他ならず、その読み解きに長けた者たちが、地域研究者といえよう。

しかしながら、言葉の読み解きに比して、カタチの読み解きは、背景となるディシプリンや個人々の特殊能力に裏打ちされた技法の結果として、ブラックボックスのように見なされ、共通の議論の場にのぼることはほとんどなかった。そこに異分野間の架橋しがたい溝がありつづけてきたともいえよう。

本ワークショップでは、こうした形態を読み解く手法を地域研究者が持ち寄り、それぞれ具体的な事例を各自の手法で分析してみることで、異分野間を架橋する議論のプラットフォーム構築を目指す。その際、今ある世界を変化の結果として受動的に認識するのではなく、私たち自身もそこに介入する積極的な存在として捉え返してみたい。世界の変化にさらされながら、よりよい世界の創造に向けた終わりなきエスキスを行うのは、他でもない、私たちであるからだ。

■ プログラム

司会 西芳実

13:30～13:40	はじめに(林 行夫)
13:40～13:55	趣旨説明(谷川竜一)
13:55～14:30	地域のコンパス：ベトナム紅河デルタの土地利用(柳澤雅之)
14:30～15:05	△3.75度の近代：韓国・景福宮前の建築交代を読む(谷川竜一)
15:05～15:40	ヤスミンの物語：マレーシア映画に表われる秩序と反抗(山本博之)
15:40～15:55	Coffee Break
15:55～16:30	ビールと鉄棒：ナチス・ドイツのオリンピックとチェコのマスゲーム(福田 宏)
16:30～17:05	パチャママの涙と夢：ペルー社会の亀裂克服の試み(村上勇介)
コメントおよび総合討論	
17:05～18:20	コメント { 川喜田敦子(中央大学 ドイツ現代史・地域研究)
	石川 初((株)ランドスケープデザイン ランドスケープアーキテクト)
	深田 晃司(映画監督『ほとりの朔子』)
18:20～18:25	おわりに(原 正一郎)

※休憩室では現地地域研が公開している各種データベースのデモンストレーションを行います。ぜひお試しください。
 問合せ先：共同利用・プロジェクト構想委員会 project@cias.kyoto-u.ac.jp



アーモンドの花咲くハウリ —ウズベク農村の家族たちを想う—

和崎 聖日

わざき・せいか……地域研究統合情報センター研究員。専門は中央アジア地域研究、人類学

私が調査地とするのは、肥沃な土壌に恵まれたウズベキスタン東部フェルガナ盆地の、「サング村」というウズベク人を基幹構成員とする農村である。そこでは、畜産や養蜂業だけでなく、農業と林業、そして果樹の栽培が盛んである。村の中心部(稠密的な集住地)の周囲に広がる畑や水田では、ソ連時代から同国の主要な外貨獲得源である綿花を中心に、麦や米、ポプラ、そしてスイカやメロンなどが大規模に栽培されている。

灌漑設備もソ連時代に体系的かつ大規模に整備された。当時建設された運河や溜池は、今でも、村の農業・生活用水の主要な水源である。そこからの水は、灌漑用水堀を下り、村全体へ流れる。水堀は人々が暮らす「ハウリ」(四方を塀で囲まれた中庭付きの居住空間)内にも施されており、そこに設けられる自宅菜園は共住する「家族」が膨大な労力を費やす場所となっている。水堀はさらにハウリからハウリへ、つまり隣人宅から隣人宅へとつながる。そのため、水と自宅菜園の管理は、隣人たちとの協力なしではあり得ない。

こうした設備や人のつながりすべてが、年間の蒸発散量が降雨量の4倍以上も高い乾燥した内陸性の気候の中で、素朴だが豊かなハウリでの「生業」を可能にしている。そこで栽培される農作物と果樹は、トウガラシやササゲ、トウモロコシ、そしてアンズやザクロ、ブドウ、さらにアー

モンドやクルミ、クワなど実に多様だ。人々は、季節に応じた「生業」をもとに自給自足的な生活を送り、また町での転売を目的とする訪問商人にその一部を売る。現金を欠く村の厳しい経済状況へのこうした対処

の営みは、日々延々と繰り返されている。

農繁期にあたる春先から秋にかけての村の様子は、日が長く、そして結婚式など様々な祝宴がこの時期に行われることもあり、明るく賑やかなものだった。それに対し、休耕期に入り食卓にも彩りがなくなる冬の村は、晴れの日が少ない上に、昼間から霧で視界が遮

られることも多く、暗く寂しい。何より、ガスも電気も供給不全となり、室内までも凍りつくかのような盆地の厳しい寒さが、私には本当につらく感じられた。村人たちは、今頃(1月執筆時点)、焚火の材料となる綿の茎を買い求め、村中を奔走しているのだろうか。

村での家族の暮らしは自然の恵みに彩られていた。そして、四季の変化に適応しようとする村人たちの素朴で堅実な姿は、その彩りをより豊かに膨らませているようにも見えた。しかし、一方で、私は村での調査生活にいつもどこか満たされずにいた。それはおそらく村の人々の生活が私の生活に深くかかわるものとして感じられなかったからなのだろう。そうしたある年の春先に、滞在先家族のハウリに咲いたアーモンドの花を見た時の感激は、寒い冬の終わりへの欲びも相俟ってか、今も鮮やかに思い出される。サング村の人たちの生活が「私」と深くつながり、そこでの地域研究により没頭できる日が来ることを願って、今もこの「旅行記」を書いている。



ハウリ内の自宅菜園に施された灌漑用水堀とザクロ



滞在先家族のハウリに咲いたアーモンドの花(左上)

新任紹介

・福田 宏 助教が着任しました・

私は中央ヨーロッパのチェコとスロヴァキアを中心に研究しています。元々の専攻は政治学なのですが、移り気な性格ゆえか、幾つかの分野を「放浪」してきました。まず最初に取り組んだのは体操。20世紀初頭のチェコで万単位での集団体操(マスメーム)が行われ、民衆のナショナリズムを高揚させていたことを知り、博士論文のテーマとして取り上げました。私にとって謎であったのは、普通の人々がどのようにして民族意識に目覚め、集団行動へと駆り立てられるのか、という点でした。

次に関心を持ったのは音楽。チェコと言えばスメタナの『我が祖国』が有名ですが、彼は最初からチェコ民族の音楽を書こうとしていたわけではありません。若い頃はドイツ語で活動していた彼が、ある時点からチェコ語を使うようになり、チェコのオペラを作曲するようになったのは何故か。ナショナリズムと芸術の関係も大きな問題です。

現在のメインテーマは地域統合論。日本人の母を持つことから我が国ではクーデンホーフ=カレルギー伯爵の汎ヨーロッパ運動が有名です。チェコ出身の彼は、第一次世界大戦の不毛な戦いを憂い、欧州諸国が一つになる

ことを提案しました。それはナショナリズムを超える試みだったのでしょうか。私は、こうした議論の妥当性について考えています。

これまでの「放浪」は、研究としては効率が悪かったと反省していますが、学際的かつ地域横断的な研究が求められる地域研では多少は役に立つかもしれません。そう願いつつ、研究を進めています。(福田宏)



コルカタの学会にて(左が筆者) 2012年9月

自著を語る

地域研のメンバーが自らの編著書を解説。執筆・編集の狙いや背景を紹介します。

書籍情報

『中央アジア』 (朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—5)

帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編
(朝倉書店、2012年、470頁)

本書は、立川武蔵・安田喜憲監修『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—』全15巻の第5巻である。中央アジアと題しているが、中央アジアに加えてコーカサス(カフカース)も対象としており、旧ソ連地域を中心に、非スラヴ・非ヨーロッパ地域としてロシア・ソ連に統合された歴史的経験、ソ連解体と各国の独立後の政治・経済・社会各分野の大変動、ソ連時代の諸政策に根を持ちながら今日ではグローバルな問題としても注目される紛争・宗教復興・環境問題・資源問題といった課題の存在など、両地域を貫く共通項に着眼する視座に立っている。地理講座ではあるが、日本のこれらの地域を対象とする地域研究の最新の成果を提示することも念頭に置いて編纂され、文理融合的な構成の執筆陣は総勢53名にのぼる。章立ては、1. 序—中央アジア・コーカサスという地域／2. 概説—自然環境と生活・エネルギー／3. 基層文化のダイナミズム／4. 人々の営み・暮らし／5. ロシア・ソ連体制の光と影／6. 紛争・和解・共存／7. 芸術文化／8. シルクロード再考／9. 日本との接点、となっている。中央アジア・コーカサス地域研究の入門書として、通して読んでいただければもちろんのこと、関心のある章あるいは節をピックアップして読んでいただくのもよいと思う。(帯谷知可)



受賞

山口哲由 地域研 研究員、2012年度人文地理学会賞(論文部門)受賞

〈受賞論文〉

「中国雲南省のチベット族村落における移動牧畜の現代的意義 —その乳生産量からの検討—」 (『人文地理』、63巻1号、pp.1-21,2011年)

【山口氏よりコメント／経済発展と環境保全の地域研究】

中国やインドなどでは経済発展が著しいが、同時に自然環境へのストレスも増加しており、そこでは経済発展と環境保全の均衡が問題となっている。特に山地は、経済発展から取り残された人びとが多く生活する一方で、その自然環境は人為的な攪乱に対して脆弱であるとともに水源涵養機能なども担っており、両者のバランスが求められる地域である。現在は、住民を主体とした環境保全計画や自然環境との調和を考慮した開発計画なども議論・推進されているものの、途上国ではそういった仕組みの導入は遅れる傾向があり、偏った施策によって問題が拡大している場合も多い。



現在でも手製の木製筒を用いた乳加工をおこなう世帯もあるが、そこから得られる収入は近年導入されたマツタケ採集にも遜色ない。

私が調査をおこなってきた中国雲南省のチベット地域も同様であり、地域で古くからおこなわれてきた移動牧畜による家畜飼養は、環境に負荷を与える遅れた農業技術であるとみなされ、人口草地の開発を伴った家畜飼養へと転換されつつある。そこで、従来の家畜飼養が自然環境に及ぼす影響を具体的に明らかにしつつ、この活動が地域の人びとにどのような経済的な価値をもたらすのかを示したのが当該の論文である。

上述したように持続的な環境保全や経済開発には分野横断的な視点が不可欠であり、地域研究という研究のあり方が活かされる場面であると言える。しかしながら、理念としての文理融合などは多く語られるものの、事例としてそれを実践した研究は非常に少なく、だからこそ、そういう地域研究を積み重ねていきたいと考えている。(山口哲由)

地域研究コンソーシアム賞(社会連携部門)受賞

2011年12月にインドネシアのアチェ州バンダアチェ市で5日間にわたり実施した国際ワークショップ「災害遺産と創造的復興—地域情報学の知見を活用して」の活動に対して、西芳実・地域研准教授が、地域研究コンソーシアム賞(社会連携賞)を受賞しました。

本ワークショップは、SATREPS「インドネシアの地震・火山の総合防災策」、京大地域研の地域情報学プロジェクトならびに「災害対応の地域研究」プロジェクトの研究成果をインドネシア社会に還元することを目的に実施されたものです。国際会議は通常英語を会議言語にしますが、本ワークショップでは、地域研究者が通訳となることで、日本側参加者は日本語で、インドネシア側参加者はインドネシア語で報告と討論を行いました。小中学校教員や地方政府関係者といった英語の国際会議に従来参加しにくかった人々を含む幅広い層の参加者をインドネシア側から得ることができ、活発な意見交換がされました。報告書は英語・インドネシア語・日本語の三言語で刊行し、日伊両言語の字幕つき記録映像(DVD)を付しました。このたびの受賞は、国際共同研究の成果を現地の研究者コミュニティだけでなく広く現地社会に還元する新しい形態を示したことが評価されたものと受け止めています。通常と異なる形態での実施だったために、関係するみなさまから多大なるご支援・ご協力をいただきました。この場をお借りしてあつく御礼申し上げます。本ワークショップを契機にシアクアラ大学津波防災研究センターと京大地域研のあいだで学術交流協定が結ばれ、継続的な国際交流が行われています。受賞を励みとして、今後も現地語を積極的に活用した国際共同研究を進展させていきたいと考えています。(西芳実)

